2017.8.26 土　会場：福島稲荷神社　入場無料

会場にはキッチンカーや縁日コーナーもあります！

14：00 ～　ワークショップ

（えりもの）

「高千穂神楽の彫り物を作ろう」

講師：高千穂夜神楽保存会の皆さん

どなたでもご参加いただけます

16：00 ～　シンポジウム

「神楽をめぐって」

出演：後藤　俊彦（高千穂神社宮司
九州の神楽ネットワーク協議会
高千穂の夜神楽伝承協議会 会長）
甲斐晃一郎（三田井地区神楽保存会 会長）
懸田　弘訓（民俗学者）
丹治　正博（福島稲荷神社宮司）
森　　幸彦（伊勢大御神宮司）
司会：和合　亮一（詩人）

17：00 ～　太鼓演奏

奉納太鼓

出演：山木屋太鼓「鴉」（福島県川俣町）

17：30 ～　神楽上演　おひねり歓迎

高千穂神楽上演

ご挨拶：佐藤哲章（一般社団法人高千穂町観光協会長）

出演：高千穂神楽（宮崎県高千穂市）

18：40 ～　神楽上演　おひねり歓迎

「ふくしま未来神楽」奉納と発表

ふくしま未来神楽

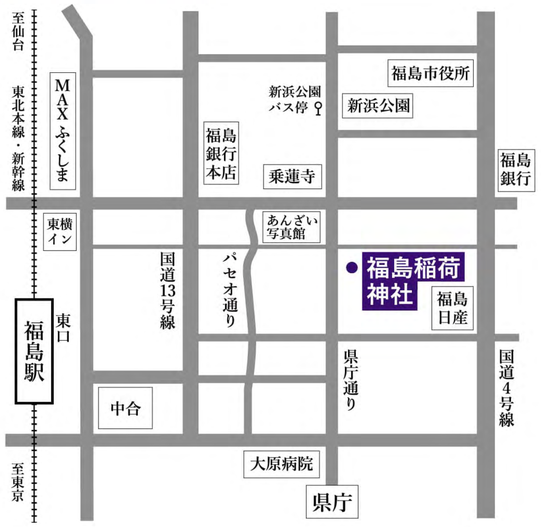
第四番　「大黒さま」

第五番　「狼」

第六番　「恵比寿さま」

監修：懸田弘訓　森幸彦
特別協力：福島稲荷神社　丹治正博宮司

会場ご案内図



■福島稲荷神社　福島県福島市宮町 1-29　駐車場 / 無

ご来場のみなさまへ

- 本イベントは雨天決行です。
  荒天時は一時中断・中止の場合もございます。
- 天候の変化に対応した服装や、水分補給をするなど各自で健康管理を行っていただき、日射病や熱中症等には充分気をつけていただきますようお願い致します。
- 会場内外で発生した、いかなる事故、事件、負傷等につきまして、主催者、会場、アーティストは一切責任を負いませんので、お客様ならびに保護者の方々の責任において対応していただきますよう、お願い致します。
- 車を運転される方、並びに未成年者へのアルコール類の販売は一切行いませんのでご了承ください。
- 貴重品等は自己管理お願いします。会場内外にて発生した事故、盗難関しまして一切責任を負いません。
- 本イベントでは、客席を含む会場内の映像・写真が公開されることがあります。予めご理解の上、ご来場ください。

主催：未来の祀りふくしま実行委員会
〒960-8068 福島県福島市太田町 27-21
NPO 法人うつくしまブランチ内　TEL:024-536-3103

特別協賛：一般財団法人ふくしま未来研究会
協賛：福島民友新聞社　福島民報社
◎その他ご協賛いただいた企業様、個人の皆様につきましてはホームページ並びに会場周辺にのぼり旗等で掲示させていただきます。
特別協力：福島稲荷神社

未来を祀る　ふくしまを祀る

未来の祀り（まつ）・ふくしま

Miraino Matsuri Fukushima

本祀り

2017 年 8 月 26 日（土）
会 場
福島稲荷神社

http://www.mirainomatsuri-fukushima.jp/

風が想うことは　風そのもの
吹くことを止めない　吹き続けること
あの日から私たちはずっと探してきた
語り得ることばとは何か
災いは全く終息していない
もたらされない〈終息〉は　言葉を奪い続けた

否　ならば　私たちの〈息〉に祈ろう
祭りを捧げよう　語らう　叫ぶ　笑う
歌う　泣く　たどりつく
声とは最も小さな私たちの風
新しい風はこないものか
清々しい風を知る人よ　求める人よ
それを待つのではない　こちらから吹かせるのだ

「ともにふくしまからこえをあげる」

声という最も小さな　私たちの風よ
ともに未来を歩く　世界中の　日本中の
同じ〈息〉をする　仲間を誘って欲しい
光る虹のあしが　夜明けの野原を渡っていく
風の行方を見つめよう

発起人　和合亮一

高千穂神楽上演

未来の祀り(まつり)カフェ Vol.2

入場無料・おひねり歓迎

会場　福島稲荷神社

高千穂の夜神楽

高千穂地方に伝承されております神楽は、天照大神（あまてらすおおみかみ）が天岩戸（あまのいわと）に隠れられた折に岩戸の前で天鈿女命（あまのうずめのみこと）が調子面白く舞ったのが始まりとされておりまして古来私共の祖先は、永い間、高千穂宮を中心に、この神楽を伝承して今日に及んでおります。

昭和５３年に国の重要無形民俗文化財の指定を受け、昭和５５年にはヨーロッパで開催された国際伝統芸術祭に招待を受けるなど、全国各地で多くの公演を行っております。その伝承は遠く、神楽研究家の間では、平安末期から鎌倉時代にかけて成立したと言われております。

高千穂の夜神楽は、毎年１１月の末から翌年の２月にかけて町内各地区にて３３番の夜神楽を夜を徹して奉納し、秋の実りに対する感謝と翌年の豊饒を祈願するものであります。また、当観光協会にて公開を行っております高千穂神楽では、昭和４６年から４０年間にわたり代表的な舞を一日もかかさず毎夜奉納継続していることから、平成２３年に「高円宮殿下記念地域伝統芸能賞」を受賞しております。

本日は、その代表的な舞、手力雄（たぢからお）の舞、鈿女（うずめ）の舞、戸取（ととり）の舞、御神躰（ごしんたい）の舞の、４番の舞を公開いたします。

手力雄の舞

天照大神（あまてらすおおみかみ）が天岩戸（あまのいわと）にお隠れになったので、力の強い手力雄命（たぢからおのみこと）が天岩戸を探し出すため静かに音を聞いたり、考えたりする様子を表現した舞でございます。

鈿女の舞

天の岩戸の所在がはっきりしたので、岩戸の前で面白くおかしく舞い、天照大神を岩屋（いわや）より誘い出そうとする舞であります。

戸取の舞

天の岩屋も岩戸（いわと）の戸も所在がはっきりしたので、手力雄命が岩戸を取り除いて天照大神を迎え出す舞で勇壮で力強く舞う舞であります。

御神躰の舞

別名国生みの舞と言い、イザナギ・イザナミの二神が酒を作って、お互いに仲良く飲んで抱擁し合い、極めて夫婦円満を象徴している舞であり、子孫繁栄、五穀豊穣祈願の舞であります。

一般社団法人 高千穂町観光協会

◆ ワークショップ

「高千穂神楽の彫り物(えりもの)を作ろう」

時　間　午後二時から

講　師　高千穂夜神楽保存会の皆さん

◆ シンポジウム

「神楽をめぐって」

時　間　午後四時から

出　演　後藤　俊彦（高千穂神社宮司
九州の神楽ネットワーク協議会
高千穂の夜神楽伝承協議会 会長）
甲斐晃一郎（三田井地区神楽保存会 会長）
懸田　弘訓（民俗学者）
丹治　正博（福島稲荷神社宮司）
森　幸彦（伊勢大御神宮司）
和合　亮一（詩人）

◆ 奉納太鼓

時　間　午後五時から

出　演　山木屋太鼓（福島県川俣町）

◆ 神楽上演

時　間　午後五時三十分から

ご挨拶　佐藤　哲章（一般社団法人高千穂町観光協会長）

出　演　高千穂神楽（宮崎県高千穂市）

ふくしまからはじめよう。 Future From Fukushima.
福島県地域創生総合支援事業
（サポート事業）補助対象事業

ふくしま未来神楽奉納

ふくしま未来神楽　第四番　「大黒さま」

ふくしま未来神楽　第五番　「狼」

ふくしま未来神楽　第六番　「恵比寿さま」

18:30 ～

入場無料・おひねり歓迎

会場　福島稲荷神社

◎演出　木村純一　◎舞台監督　関口修　◎照明　佐藤康孝

◎監修　懸田弘訓／森幸彦
◎特別協力　福島稲荷神社　丹治正博宮司

参加アーティスト ※順不同

作　和合亮一（詩人）

1968年福島市生まれ。詩人／国語教師／福島県教育復興大使。第一詩集「after」で第４回中原中也賞、『地球頭脳詩篇』で第４７回晩翠賞。「福島県文学賞」「みんゆう県民大賞」「NHK東北放送文化賞」など。震災直後の福島からTwitterにて「詩の礫」と題した連作を発表。海外でも多言語に翻訳され、オランダ・コンセルトヘボウでの東日本大震災追悼コンサートに招致、被災地が抱える思いを発信する。

作曲・指揮　嶋津武仁（作曲家／福島大学名誉教授）

1949年 静岡県下田市生まれ。東京学芸大学及び同大学院（作曲・指揮専攻）を修了。現在、福島大学名誉教授（作曲・指揮）／元福島大学附属中学校長／オーケストラ・フィルジッヒ芸術監督／福島オペラ協会理事／日本作曲家協議会、日本現代音楽協会会員。

神楽舞振付　橘正鳳

1950年生まれ。6歳の6月6日より、日本舞踊橘流入門。故橘左鳳延師に師事。高校卒業後　故二代目橘流宗家橘裕代師、三代目橘流家元橘芳慧師に内弟子として修行。国立劇場、歌舞伎座、明治座、新橋演舞場、舞踊協会公演、新春舞踊大会、創作舞踊公演、海外公演等に出演。

舞踊指導　花柳沙里樹

一般社団法人 伝統文化みらい協会理事長。2004年より文化庁助成「伝統文化子ども教室」を主催。門弟は新日本舞踊コンクールに於いて2011年、2013年に文部科学大臣賞受賞。2013年より橘正鳳師と共に、福島の民俗芸能伝承を目的とする「ふくの里祭り」を主催。

作曲・演奏　遠藤元気（和太鼓奏者／山木屋太鼓 会長）

2001年、川俣町山木屋で地域に根差す若者の育成と発展を目的に結成。以来、故郷の自然をテーマに曲を創作し活動を続けている。和太鼓を通して故郷への想いを絶やすことなく伝えていきたいと、ソロ、ユニット、メンバー全員と多彩な形態で精力的に演奏する。

演奏　山木屋太鼓「鴉」

平成13年に発足し、今年で結成15周年を迎える。結成当時から、変わることなく大切にしているテーマ「美しい自然、そしてここが故郷」現在は、子どもから社会人までの打ち手約17名が、世代を超えて活動中。「鴉」（からす）は社会人のチーム構成。たくさんの支えや応援の中で和太鼓の活動ができることに感謝し、故郷の鼓動をこれからも伝え、発信していきます。

演奏　齋藤恭太（ヴィオラ）

1957年福島市生まれ。県立福島高等学校在学中に管弦楽部を設立し、初代コンサートマスター。山形大学教育学部特設音楽科卒業後、宮城フィルハーモニー管弦楽団（現仙台フィル）でヴァイオリン奏者として活躍。震災後は東北各地で音楽の力による復興センター主催の「復興コンサート」に数多く参加。現在、フリーのヴァイオリニスト・ヴィオリストとして演奏、後進の指導などで活躍中。

演奏・唄　藤野恵美（キーボード）

福島県岩瀬郡鏡石町生まれ。宇都宮短期大学音楽科電子オルガン専攻科卒業。ブライダル・セレモニープレイヤーとして活動後、現在はソロ楽器やシャンソンの伴奏、朗読舞台での即興演奏など鍵盤奏者として活動している。2015年はソロ音源【酒場マチルダ】を発表。

演奏　柴田晶子（口笛奏者）

秋田県出身。福島県郡山市を拠点に、数少ないプロの口笛奏者として全国・海外で演奏活動を行っている。国際口笛コンクールにおいて、2010年（中国）／2012年（アメリカ）の二度、女性成人部門で総合優勝、2014年（日本）は大会審査員を務める。

演奏　熊田亨徳（バリトン）

福島大学人間発達文化学類スポーツ芸術創造専攻（音楽）卒業。東京学芸大学大学院音楽教育専攻音楽コース修了。これまでに声楽を竹沢嘉明、今尾滋、大野徹也、楽曲分析を嶋津武仁の各氏に師事。福島オペラ協会準会員。

神楽面デザイン・制作　橋本彰一（工芸作家）

三春張子と三春駒の発祥の地と言われ、和紙を用いた張り子の人形工房が集まる郡山市の集落「高柴デコ屋敷」の本家大黒屋 21代目当主。江戸期の元禄時代から300年以上の伝統を受け継ぐ伝統的手法を維持しつつ、日本の和紙、張り子文化を世界にPRしている。

衣装デザイン・製作　NorikoFerry

福島市生まれ、桑沢デザイン研究所ドレスデザインオートクチュール科卒。アメリカでフラメンコ、ベリーダンスなどのステージ衣装、ブライダルドレスなど、数多くを手がける。枠を超えた発想と色彩感覚には定評がある。幼少の頃より日本舞踊を始め、橋式部の名前を頂いている。

口上　酒飲亭いさん（社会人落語家）

北海道網走市出身。1975年東京都立大学入学と同時に落語研究会に入会「酒飲亭いさん」となる。積水ハウス入社、福島へ配属。250棟を建築販売。1992年より「うつくしま芸人会」に所属、2014年より会長。2007年「ふくしま素人落語の会」を仲間と設立。毎年100席以上の落語口演を行っている。会場の雰囲気に応じて古典、新作など臨機応変に対応。

神楽舞

口上

橋式部
紙糊（劇団120○EN）
諏佐　葵（伝統文化みらい協会）
馬場千佳（伝統文化みらい協会）
宮島　凜（伝統文化みらい協会）
片桐杷子（伝統文化みらい協会）
加藤捺紀（劇団カスカ・ダール）
大内悠生
奈良夏妃（劇団120○EN）
川島ゆかり（劇団120○EN）
山崎未遥（伝統文化みらい協会）
髙田ひなの（伝統文化みらい協会）
石田　凪（伝統文化みらい協会）
橋谷田晴（伝統文化みらい協会）

未来の祀り・ふくしま

Miraino Matsuri Fukushima

ふくしま未来神楽

【作品に寄せて】和合 亮一

ふくしま未来神楽　第四番

「大黒さま」

見あげよ　季節の吾妻山を　そして白うさぎを
大黒さまは　誰もが知っている　幸せの神様です
白兎を助け出してくれた　あの神話はあまりにも有名です
ならば　まさに福島の風景を守ってくれる　天の神ともいえるでしょう
山の峰ではなく　夏の稲荷神社に　ひょっこりとあらわれた白いウサギと
大黒さまが繰り広げる　可愛らしい　新しい舞いが
ふくしま未来神楽「ふくしま七福神シリーズ」の始まりです

ふくしま未来神楽　第五番

「狼」

飯館村「山津見神社」　全村避難後の２０１３年に
残念ながら　歴史ある拝殿が　焼失してしまいました
お社の天井には　２３７枚の狼の絵が飾られてありましたが
それもみな　失われてしまいました

しかし　２０１５年と２０１６年に　残存していたデータを基に
新しく　描かれました　拝殿の再建とともに復元
この時　飯館村　そして　福島の人々はみな
誇りをみなぎらせたように思います
変わらずに　福島の山を守りつづける「狼」そして「大神」を祀り
山を　時を　季節を　かけめぐる　疾走感と
命の躍動を託して　新しい未来神楽を　創作いたしました

ふくしま未来神楽　第六番

「恵比寿さま」

夏から秋へと　福島の大地は　豊かな実りを迎えます
風になびく　野原の草影は　陽光を映し出して
宮沢賢治が　故郷を　かつて　そう　歌ったように
「光る海」に　見えてきます
その豊かな風景の中で　福をつれてくるかのように
恵比寿さまが　何やら　ゆっくりと釣りを楽しんでいます
福島に来るもの　恵みあれ　来福の　新しい創作神楽です

ふくしま未来神楽

【解説】及川 俊哉

ふくしま未来神楽　第四番　「大黒さま」

大黒さまは縁起のいい「七福神」の一人です。もともとは「大黒天(マハーカーラ)」といい、インドのヒンズー教の神様でした。インドでは青黒い体をし、三面六臂で忿怒の形相をしている荒々しい神でしたが、仏教に取り込まれて中国から日本に渡る間に、柔和な造形になり、台所や食べ物の守護神になりました。やがて民間で信仰されるようになり、室町時代頃には頭巾・小槌・大きな袋をもって米俵に乗るという今の姿が定着したようです。

仮装して「大黒舞」を舞う芸人たちが全国各地をまわるうちに、日本人になじみ深い「福の神」として信仰されるようになりました。江戸時代には、正月に七福神の乗った宝船の絵を枕の下に入れておくとよい初夢を見ることができるという風習が生まれています。

「大黒」という漢字が「大国」の音読みとつながることから、日本の神話に現れる出雲の「大国主命（オオクニヌシノミコト)」と同じ神様だと理解されるようになりました。大国主は「因幡の白兎」を助けた神様として有名です。大国主がある日海岸を通りかかると、皮をむかれた赤裸のウサギが泣いていました。大国主はそれを見て、「きれいな水で体を洗い、蒲の穂をまき散らしてその上で寝返りを打って転がりなさい」と教えてあげました。これによって兎は元の白兎に戻り、たいそう喜んだということです。

今回の未来神楽はこの因幡の白兎の物語を借りて、作られたものです。

因幡の白兎を吾妻山の種蒔き兎にあてはめて、その兎を群生する蒲穂で大黒さまが治療してくれたという内容になっています。

大黒さまは飲食の豊かさを司る豊穣の神です。今年も福島に豊かな実りがあるよう、心を込めて舞を舞います。

ふくしま未来神楽　第五番　「狼」

ニホンオオカミは明治38年に奈良県で捕獲された一頭を最後に生存が確認されておらず、絶滅したものと考えられています。全身剥製は世界に四体しか現存していませんが、そのうちの一体である東京上野の国立科学博物館所蔵のものは福島県産のオスだということです。

狼はシカ、サル、イノシシなど農作物を荒らす動物を食べることから山村で信仰されてきました。しかし、そのように人間に利益をもたらしてくれる一方で荒々しく恐ろしい動物であうということで、日本人の自然観や神概念に大きな影響を与えた動物でもあります。

飯舘村の山津見神社は狼を「ご眷属(お使い)」とし、狛犬の代わりに左右に並んだ狼の像が参拝者を迎えるなど、狼への信仰が深い神社です。社殿の裏山の頂には峩々たる様相の磐座がそびえています。古い鍛造の鎖をつたわって登っていかなければなりませんが、いかにも昔は狼がかけ巡っていたのだろう、いまもひょっとしたら狼が現れるのではないか、と思わせるような険しくも厳かな光景が広がっています。狼は山野を駆け巡ることから交通安全の御利益があるとされます。また山津見神社では白い狼が村を荒らす山賊の居場所を伝えてくれたという創建由来があるため、盗難避けの御利益もあるとされています。

社殿の天井絵は絶滅したニホンオオカミの生態をよく残しているものとして、生物学的にも貴重な資料とされてきましたが、震災後全村避難のさなかに焼失してしまいました。しかし、火災の前年に天井絵が研究者の手によって詳細に撮影されていたため、復元することができました。

震災後見事に復元された狼の天井絵。今回の未来神楽ではその天井絵にあやかって、福島の復興を祈念する作品になっています。

険しい山野を疾駆する白狼のように、さまざまな困難を乗り越えて、速やかな復興がなされるようにと、祈る気持ちを込めて演じます。

ふくしま未来神楽　第六番　「恵比寿さま」

恵比寿さまも大黒さまと同じく七福神の一人です。七福神のうち、インドや中国を出自としない、日本出身の神は、恵比寿さまだけです。しかし、もともとはどのような神様だったのか、はっきりとはわかっていません。

民俗学者の折口信夫は壱岐の伝統を調べた際に、漁師たちが鯨の胎児を「エビス」と呼んで大切に葬ることから、鯨の神に豊漁を祈る信仰が元ではないかと述べています(「壱岐の水」より)。兵庫県西宮神社では記紀神話のイザナギ・イザナミの最初の子供であるヒルコが海に流された後に漂着した神様がエビスであるとしています。岩手県早千峰神社に伝わる「裏三番叟」という神楽の題目では海に流されたヒルコが、その後大変な艱難辛苦を経て人々を救うエビスになったという物語が描かれます。

恵比寿さまの信仰を全国に伝えたのも、やはり旅の芸人でした。人形芝居やお面をつけた仮装の姿で「西の宮からえびす様がお礼に来ました」と唱えて家々を廻る芸能が、大正初年までは見られた、と折口信夫は述べています(「国文学の発生(第二稿)」より)。二本松市には「七福神舞」「えびす舞」が伝統芸能として保存されています。

恵比寿さまは豊かさをもたらす神として商売繁盛、五穀豊穣の神に変容していきましたが、現在われわれが目にするようなイメージは、芸能を職掌とする人々によって作り上げられてきたものと言えます。一つの姿にこだわらずに時代のニーズに合わせてさまざまに変容する柔軟さが、日本の神々の柔軟さや包容力を示しているとも言えるでしょう。

恵比須さまは、「言代主命(コトシロヌシノミコト)」という神様と同一だとされています。この神様は大国主命の息子で、記紀神話の「国譲り」の場面で漁をしていたことから、豊漁の神である恵比寿さまと重ね合わせて信仰されるようになりました。大黒さまと恵比須さまは親子だとして、ペアで描かれることがあります。福島稲荷神社の御祭神は「豊受比売命」といい、食べ物をつかさどる神様です。大黒さまと恵比須さまも豊作の神様であることから、配神として福島稲荷神社に祀られています。

今回の未来神楽では、恵比寿さまが、福島に現れます。東北を代表する詩人である宮沢賢治の詩「高原」を本歌取りし、方言で書かれた親しみやすい表現の神楽です。「えべっさん」「おべっさん」という呼び方は関西方言で恵比寿さまを親しく呼ぶときの呼びかけ方になります。

日本に古くから伝わる「えびす舞」を、その精神は受け継ぎながら、今回の未来神楽では新しく振り付けなおしました。方言の優しい調べとともに、会場全体で福島が今年も豊かであるようにと祈っていただければと思います。